記号コミュニケーション
インターフェイスコミュニケーション

―― コミュニケーションとは果たして意味／情報の伝達であるか ――

井上　勉

文化社会は記号から成り立っており，人間は記号存在である．この社会ではコミュニケーションは記号を介して行われる．記号はコミュニケーションが行われる当事者間の接面，インターフェイスである．そのインターフェイスを介しての行動統合は，コミュニケーション当事者それぞれにおいてオートポイエティックに自己言及的である．自己言及的なオートポイエーシスシステム間においてコミュニケーションが可能なのは，社会内に認知的平行性とコミュニケーション行動の平行性が存在し，それぞれの自己言及的行動が，相互にうまく噛み合うことによる．

*

バフチンによれば，意識は記号によって満たされている．記号を解読するという作業は，ある受け取った記号を，他のすでに解読した記号に関連づける作業である．記号の産出と解読の連鎖は，記号から記号に至り，さらに新たな記号へと進んでゆく，切れ目なく一貫して続く一本の鎖である．この記号の連鎖は個人の内部においてはその意識の連続を成り立たしめるものであるが，同時に，その連鎖は個々人の意識と意識の間に渡され，それらの意識を互いに結びあわせるのであり，こうして社会的コミュニケーションが行われる．自己内記号過程は外部における記号過程を前提する．記号は先ず社会内で形成され，しかる後に個人の内部に移される．内面化された他者との間の言語的（記号的）交渉を内的発話という．この内的発話において，人は互いに他者を理解する．コミュニケーション当事

者は，それぞれの内的発話において互いに触れ合い，了解し合う．この各人の内的発話の脈絡の中で，他人の発話の受容も，その理解も行われる．他者の発話を理解するということは，その発話に対して自らの方が一定の方向決定，位置決定をするということであり，理解すべき相手の発話の一つ一つの言葉の上に，自らの発話の中で一連の応える言葉をいわば積み重ねることである．

今見たように，バフチンのいう内的発話は人が他者と交渉する接触面である．人と人とが，あるいは人やものが互いに関わり合う場合，その相互作用は接触面，相互作用領域を介して行われる．その接触面，相互作用領域をインターフェイスと呼ぶ．坂本百大によれば，このインターフェイスという言葉は今日では「場」という考えの拡大につれて多方面で用いられるようになってきている．場的考えでは，ある一つの状況を，互いに独立な二つのものの相互作用の因果的な結果と見るのではなく，むしろその両者を一つの相対的状況の二面としてとらえるのであるが，その二面の接触面が，その接触を可能ならしめる場としてのインターフェイスである．このインターフェイスにおいて一方が他方の情報を獲得し，そしてその獲得された情報にしたがって自らを変換する．注意すべきは，自らを変換するということであり，他方に対して指示するのではないということである．

このインターフェイスの考えを考慮に入れながら認知生物学が語るオートポイエーシスシステム論を見てみる．オートポイエーシスシステムという概念では，システムとその構成素が循環的に連結され，定義される．すなわち，オートポイエーシスシステムは，システムの構成素を産出するプロセスの連鎖によってシステムとして規定される．これらの構成素はそうしたプロセスを生みだし，またこのプロセスは構成素を産出する．オートポイエーシスシステムは，自己言及的システムであって，自らのオートポイエーシスの維持のために，自己自身の内部にないような，あるいは自分自身の一部でないようないかなる情報も必要としない．システムがその循環的な有機構成のために必要とする情報はすべてこの循環的有機構成自体の中にある．

こうしたオートポイエーシスシステムの単位体は，しかしもちろん周囲世界と相互作用を行う．オートポイエーシスシステムが認知する領域は，

そのシステムが自己同一性を失うことなく，言い換えると，オートポイエーシスを継続しうる限りで，参入しうる相互作用領域である．複数個のオートポイエーシスシステムの単位体の行為において，ある単位体の行為が相互に他の単位体の行為の関数であるような領域がある場合，単位体はその領域で連結（カップリング）している，という．そして，その相互作用領域を「媒体」という．媒体における，所与のシステムにとって重要な変化は，そのシステムにとっては，自らのオートポイエティックに首尾一貫した構造の攪乱ないし変形を意味する．そのため，オートポイエーシスの過程でこの攪乱の補償が作動し，その結果，そのシステムは媒体の新たな状態と整合し，逆に，このシステムはその修正された構造でもって媒体のその新たな状態を限定する．こうして，有機体Aのオートポイエーシス行為は，有機体Bの変形の起源となり，また有機体Bの補正的行動は逆に有機体Aの変形の起源として作用する．そして再び有機体Aの補正的行動は，Bの変形の起源として作用し，カップリングが中断されるまで回帰的に持続する．

認知生物学によれば，生命システム間におけるコミュニケーションは，当事者のそれぞれが，自らの認知領域において相手を方向づけるように行動することによって行われる．この相互作用は，単位体が構造的カップリングを経て生み出す媒体についての記述との相互作用として行われるのであって，相手そのものとの相互作用は存在しない．言い換えると，複数個のオートポイエーシスシステムは，それぞれのシステムが固有の認知領域においてそれぞれの仕方で行動することによって相互作用するのである．

オートポイエーシスシステム間のコミュニケーションにおいては，情報ないし思想の伝達，授受というものは存在しない．コミュニケーションは，情報の交換ではなく，個体の認知領域において相互に平行して情報を構成することである．情報は，個々の有機体によって，それが被る変形から生みだされる．個々の有機体における変形と，これに続いて起こる有機体内部の生命プロセスの作動の結果が情報なのであり，この情報がその有機体の恒常的な行動統合を制御するのである．

では，コミュニケーションの当事者間に情報や思想の伝達がないとすれば，人間におけるように，合意的社会的行動が存在するのは何によって説明されるのか．それは，まず，同種類に属する有機体は，その認知領域を

同じように形成し，したがってある程度の認知的平行性を示すと考えられるからであり，そしてそこから更に，コミュニケーション行動においても平行性を示すと想定されるからである．このコミュニケーション行動における平行性は，長い時間をかけた文化的発展と個人の社会化のプロセスの中で強化される．

今考察したことを先にいったインターフェイスの考えと照らし合わせてみる．複数個のオートポイエーシス単位体がカップリングしているならば，それらは媒体において重なり合っているので，それらのものはそれぞれ独立の存在ではない．二つのオートポイエーシスシステムが相互作用しているならば，相互作用している限りにおいて，その二つのシステムはそれぞれ独立の二つのものではなく，媒体という一つの状況における二つの側面である．それぞれにおける行動は，他方における行動と絡まり合っている．しかし，それぞれのシステムにおける行動統合は互いに独立している．独立しているというのは，次の意味においてである．媒体における変化は，一方のシステムにとっての変形を引き起こし，この変形が，そのシステムのオートポイエーシスを継続するために，そのシステムの内部でのある生命プロセスの作動のきっかけとなる．その作動がどのようなものとなるかは，まさにこのシステムに依存していることであって，媒体には依存していないし，媒体を介して相互作用している相手にももちろん依存していない．

先にいった意味でのインターフェイスの考えでは，インターフェイスを介して一方が他方の情報を獲得し，そしてその獲得された情報に従って自らを変換してゆくということであった．インターフェイスはオートポイエーシスシステムでは何に相当するだろうか．このシステムにおいては，情報は自らのシステムにおける変形とこれに続く作動に基づいて作り出されるのであるから，「媒体」ではなく，むしろこの変形と作動がインターフェイスに対応するといえる．しかしながら，情報はあくまで自らのオートポイエーシスの継続のために作り出されるのであり，その情報はそのシステム自体の情報であって，オートポイエーシスシステムは他者の情報を獲得するのではないということが，坂本のインターフェイスの考えと相違する点である．

生命システムは一つのオートポイエーシスシステムであるが，人間の場合，生命システムの上に更に意識というオートポイエーシスシステムの存在を指摘できる．意識システムの構成素は記号である．人が記号存在として他者と相互作用をする場合，そのときのコミュニケーション状況の全体が，コミュニケーション当事者の意識システムの媒体であるといえよう．当事者間の相互作用の過程で，コミュニケーション状況は刻々に変化する．この媒体における変化は，意識システムにおける変形を引き起こす．それによって，意識システムのオートポイエーシスの継続のために，言い換えると，自我意識の同一性の維持のために作動が起こる．その結果として，コミュニケーションの中でのある出来事ないし事柄が統覚される．これら一連の過程は，システムの構成素である諸記号の結びつきにおける変化，一連の記号過程の遂行として起こるといえる．文化的存在者，即ち記号存在者間のコミニュニケーション過程をオートポイエーシスシステム論的にいえば，こういうことになろう．なお，意識システムにおける変形と作動が他者と交渉するインターフェイスであるということになろう．

システムの内部においてはこのような過程が生じるが，システム間のコミュニケーションは，それぞれが自らの認知領域（媒体）において相手を方向づけるように行動することによって行われる．しかし，この方向づけも自己言及的であって，それぞれの自己言及的行動が，相互にうまく噛み合うことによってコミュニケーションは遂行される．記号的・言語的コミュニケーションは，「言語的相互作用に参加している話し手／聞き手の（それぞれにおける）自律的な発言／理解の行為がいわば互いに噛み合う」（G. Rusch）ことによって生起してゆく．その際，両者の間に情報伝達や指示が行われるように観察者には見えるが，そのような「情報性と指示性は……発言と理解において相互に自律的な二つの有機体の間の協働作用」（同）から生み出されるのである．

（第80回関西大学独逸文学会研究発表会における発表要旨）